

このコーナーでは、農業のちょっとしたコツを、市の営農指導員からお知らせします。

営農指導員のワンポイントアドバイス

営農指導員 若山 謙

施設を使って野菜を栽培してみませんか

施設栽培

施設栽培とは？

ガラス室やビニールハウスなどを利用して野菜、花き、果樹などを栽培する園芸です。加温施設を備えるものと無加温のものがあります。

施設栽培の長所

- ▼1年を通して栽培できる（収穫時期を人為的にコントロールできる）。
- ▼その作物が市場に少ない時期でも収穫できるため、より高値が狙いやすい。
- ▼外と隔離できるため天候、害虫の被害が露地より少ない。

施設土壌の特徴と管理方法

施設栽培は、単位面積当たりの収穫量を最大限に高めようと工夫され、発展した技術です。ただし、以下のような土壌管理が行われることから、さまざまな障害が発生する場合があります。

施設栽培土壌の一般的な特徴

- ▼降雨の影響を受けないため、土壌中の肥料養分が流亡しない

▼有機物や化学肥料が多く施用されることが多い

▼同じ作物が連続して栽培されることが多く、土壌中の肥料成分が偏りやすい

▼作物に必要な量の水やりができる

▼施設中の温度は外気に比べ高い

施設栽培土壌の管理

施設栽培では土壌中の肥料成分や水分が上方向に移動し、土壌表面に肥料成分が多く集まってしまう。それがひどくなると、作物は根が障害を受けて養水分が吸収できなくなり、生育が不良になります。

【対策】

- ▼多量の水やりや冬期間の除覆（ビニールなどの覆いをとる）によって土壌中の養分を流亡させます。
- ▼下層土の養分が少ない場合は、深く耕します（天地返し）。
- ▼トウモロコシなどイネ科の作物を栽培し、土壌中の養分を吸収させます。

▼施用する肥料は土壌中の養分が急激に高まりにくい、緩効性肥料（ゆっくり効く）、有機質肥料などを使用します。

▼作付け前に土壌診断を行い、施肥量を加減します。

問い合わせ

農業振興課 農業振興係
0824・73・1132

第9話

比婆いざなみ街道物語



街道沿線に存在するさまざまな資源をシリーズでお伝えする「比婆いざなみ街道物語」。

今回は、伝説の未確認生物「ヒバゴン」について紹介します。

「ヒバゴン」出現！
地元は 大騒ぎ！

「ヒバゴン」は、比婆いざなみ街道沿線、西城町（旧比婆郡）の比婆山の麓で目撃された、謎の類人猿です。

出没地にちなんで「ヒバゴン」と名付けられた謎の生物は、逆三角形の顔で、全身が毛で覆われたまるでゴリラのような体だったといわれています。

ヒバゴンは昭和45年に初めて目撃されて以降、何度も目撃され、遂には「UMA（未確認生物）」として、日本全国に報道されました。その反響は大きく、全国の大学などによる探検隊が相次いで現地調査を行いました。当時の西城町役場（現市役所西城支所）には「類人猿係」が設置され、対応に当たるほどでしたが、昭和50年ごろにはヒバゴンの目撃情報は次第になくなりました。

5年間に及ぶヒバゴン騒動は、大きな謎を残したまま終息を迎え、その当時の様子は今でも伝説として語り継がれています。

市のPRロゴマークキャラクターなどとして

目撃情報によると怖そうないメージのヒバゴンですが、今では愛くるしい姿となって市民に愛され、「いざなみツク」などの市のイベントに出演するなど、比婆いざなみ街道を象徴するキャラクターとして活躍しています。その他、「ヒバゴンネギ」や銘菓「ヒバゴンのたまご」など、特産品のパッケージにも使用されています。

もつすぐ目撃から50周年

来年はヒバゴンが目撃されてから50周年となる節目の年です。もしかしたら、ヒバゴンが山の中からひょっこり現れるかも知れませんよ。



問い合わせ

いちばんづくり課 いちばんづくり係
0824・73・1278